

発よつも消よつも —— 楊振声「阿蘭的母親」から「濟南城上」へ

杉 村 安幾子

1. 序——楊振声と「五四」への道のり

中国においては、1911年の辛亥革命を経て翌12年に中華民国が成立、宣統帝（愛新覺羅溥儀、1906-67）の退位をもって清朝が崩壊するわけであるが、広く文化・社会的に新時代の幕開けを告げたのは、1919年の五四運動であったことは周知の通りである。後に「五四新文化運動」とも称されるようになったこの一大ムーブメントは、北京の学生運動に端を發し、全国に拡大、結果的には従来の様々な伝統的文化的価値観を覆していく。同時にそれは、現代的な意味での愛国主義・民族主義の誕生ともなった。¹

5月4日午後1時、北京の大学19校、約3000名の学生が天安門前に集結。彼らはデモ行進を行い、交通総長曹汝霖（1877-1966）の邸宅であった趙家楼を襲って火をかけ、偶々居合わせた駐日公使章宗祥（1879-1962）を殴打する。この事件は多数の負傷者を生み、結果、32名の学生が逮捕された。以上が狭義の「五四運動」の大枠である。²

この運動の背景にあったのは、19世紀における西欧列強及び日本の帝国主義支配である。1898年、ドイツは中国の山東半島の一部を租借し、鉄道敷設、石炭採掘など山東省全体に及ぶ權益を手にした。1914年、第一次世界大戦が勃発。日清戦争（1895）と日露戦争（1905）での大勝後、遼東半島を得て、そのまま權益の拡張と満洲侵出を企図していた日本がドイツに宣戦布告し、11月にはドイツ軍の根拠地であった青島を占領、山東省におけるドイツの權益奪取に成功した。1915年1月、日本政府は中国清朝政府に対し対華二十一条要求を突き

付ける。それは山東のみならず、南満洲・東部内モンゴにおける權益に始まり、五項目にわたって特殊權益を要求するものであった。こうした具体的な要求内容に加えて、駐華公使日置益（1861-1926）が当時の大総統袁世凱（1859-1916）に直接提出するという外交慣例を無視したやり方は支配的・強圧的であった。更に日本は交渉を長引かせるのを厭い、5月7日に50時間以内の回答を要求するという最後通牒をつきつける。欧米諸国の干渉を期待して裏切られた袁世凱は5月9日、やむなく日本の要求を呑んだのである。これを中国の民衆が国恥と受け止めたのも当然のことであった。1918年11月、第一次世界大戦が休戦となり、翌年1月からパリで講和会議が開かれた。中国側は山東の主権回収を期待したが、イギリス・フランス・ロシア・イタリアの各国と密約を交わしていた日本によって、山東のドイツ權益は日本へと無償譲渡されるに至る。それを受けての5月4日であった。即ち五四運動はそもそも、学生達がデモ行進で掲げたプラカードに「中国は中国人の中国だ」、「山東の権利を回収せよ」、「我に青島を返せ」などとあったように、「国土」という自分達が属する国の領土を外国人が軍事的に支配することへの強い抵抗であったのである。

五四運動の趙家楼焼き討ち事件で逮捕された学生32人の中に、後に国立青島大学の初代校長となる楊振声（1890-1956）がいる。³ 当時、楊は北京大学国文門の学生であった。楊が同じく北京大学の学生であった傅斯年（1896-1950）らとともに、運動に参加し、強く山東の権利回収を訴えたのは、無論広く祖国のため、民族のためであっただろうが、直接的には彼らが当の山東出身であったからであろう。⁴ 他国によって奪われた自らが生まれ育った地を、自らの手に戻したいというのはごく当然の心情である。ここに楊の民族主義的愛國心の発露を見ることができるだろう。楊は北京大学卒業後、米国ハーバード大学・コロンビア大学に留学。帰国後は北京大学、武昌大学、中山大學、燕京大學、清華大學等の教授を歴任し、清華大學では文学院院长、教務長等を務めた。国立青島大學校長（1930-32）を辞任してからも、長沙臨時大學教授、西南聯合大學叙永分校主任及び教授などを歴任し、抗戰勝利後は北京大学教授兼中文系主任、東北人民大學教授となっている。教育行政エリートの道を歩んだ楊振声であったが、彼の内には五四運動に参加した時の熱い思いが常にあり続け、彼の創作

にはそうした思いが反映されている。楊振声自身と彼が民族主義的愛国心から参与した五四運動については既に論じたため⁵、本稿では楊の作品の中から短編小説「阿蘭的母親（阿蘭の母親）」と「済南城上（済南の城壁の上で）」を取り上げ、楊の作風の変化に見られる民族主義的愛国心の変容について考えてみたい。

2. 「阿蘭的母親」と「済南城上」

2. 1. 掲載誌『現代評論』

楊振声の「阿蘭的母親」は『現代評論』第3巻第68期（1926年3月27日）に、「済南城上」は『現代評論』第7巻第184期（1928年6月16日）に掲載された。楊は1925年冬から北京大学中文系で教授を務めていたが、1927年には広州の中山大学英吉利語言文化系に異動、教授としてイギリス文学史、近代イギリス小説などの授業を担当していた。1928年7月下旬には北京に戻り、8月には燕京大学中文系の教授に、次いですぐ9月には清華大学の教務長兼中文系主任となっているため、二作とも広州での執筆ということになる。⁶

『現代評論』は1924年12月に北京で創刊され、北京大学法律系教授王世杰（1891-1981）、同大物理系教授兼劇作家丁西林（1893-1974）が主編を務め、実質的な編集業務は陳源（1896-1970）や徐志摩（1897-1931）が担当し、政論や時事評、文学作品、文芸評論などを掲載した総合型週刊誌である。郭沫若（1892-1978）、郁達夫（1896-1945）、胡也頻（1903-31）、聞一多（1899-1946）らが小説、詩を発表しており、中国現代文学史上、当時の知識人に大きな影響を与え、後の『新月』月刊につながる雑誌との位置付けがなされるが、政治面では段祺瑞（1865-1936）から蒋介石（1887-1975）までの封建軍閥及び国民党右派を支持していた。五三〇事件（1925）と北京女師大事件（1925）、三一八事件（1926、後述）に際しては保守的な体制擁護の姿勢を見せ、当時『語絲』に論陣を張っていた魯迅（1881-1936）と激しい論争になったことでも有名である。1928年12月に第9巻第209期をもって終刊となった。⁷

楊は『現代評論』において編集業務を担当したこともあり、『現代評論』上で

発表した文章は以下の通りである。⁸

- 1925年1月31日 第1巻第8期 評論「礼教与藝術（礼教と藝術）」
 1925年5月16日 第1巻第23期 民歌「河辺草——Ballad（河辺の草）」
 1926年1月1日 一周年記念増刊号 小説「瑞麦（めでたい麦穂）」
 1926年1月9日 第3巻第57期 民歌「這個年頭兒（その年の初め）」
 1926年3月6日 第3巻第65期 雑文「從紅毛洋鬼子說到北大国学門周刊（毛唐から北京大学国学門周刊までを語る）」
 1926年10月30日 第4巻第99期 散文「圓明園之黄昏（円明園の黄昏）」
 1926年11月20日 第4巻第102期 小説「小妹妹的納悶（妹の憂鬱）」
 1927年1月1日 二周年記念増刊号 論文「詩經裡面的描写（詩經中の描写）」
 1927年3月5日 第5巻第117期 詩「巴黎之別（パリの別れ）」
 1927年4月23日・30日 第5巻第124期・125期 小説「她的第一次愛（彼女の初めての愛）」
 1927年10月22日 第6巻第150期 散文「再写圓明園之黄昏（再び円明園の黄昏について書く）」
 1928年6月 三周年記念増刊号 論述「広州大火下の日記（広州大火の日記）」⁹

この時期の楊振声の文筆活動は、上記一覧が示す通り詩歌・小説から散文・論文まで多岐にわたる。中国の1920年代は、厳密な意味での専業作家というものがまだ登場しておらず、所謂「文人」は皆、詩・小説と言ったジャンルに関わらず何でも書いていた。

2. 2. 「阿蘭的母親」——ある母娘と三一八事件

「阿蘭的母親」は、3歳の少女阿蘭の父親が死んだところから始まる。夫を喪った阿蘭の母親は身も世もなく泣き崩れるが、幼い娘の天真爛漫な笑顔を見て、生きる希望をつなぐ。それ以降、阿蘭の成長だけが母親の楽しみとなり、彼女は阿蘭が学校へ通い出すと、一人で家にいることが寂しくてたまらなくなるのだった。阿蘭が14歳の春、病気で寝込んだ時には、母親は必死の看病をし、娘にもしものことがあったら…と不安になる。幸いにも阿蘭は回復し、3月18日、元気に学校へ行った。この日、北京では民衆が請願のデモ行進を行い、阿蘭も

学校の隊伍に加わってデモに参加した。ところが、政府の軍警が民衆に発砲し、阿蘭は殺されてしまう。デモに参加して阿蘭の遺体を見た教師の馬先生は、阿蘭の家に駆け付け、母親に娘の死を告げようとする。しかし、熱心に娘の服を作り、娘だけが彼女の人生と生活の中心であると語り、阿蘭の帰りの遅いのを心配する母親に真実を告げることができず、馬先生は目に涙を浮かべて家を飛び出して行った。

作品の背景となっているのが、1926年3月18日に実際に北京で起きた三一八事件である。当時の中国は西欧列強及び日本の侵出問題を抱えていたが、直接的には国内における軍閥の相互対立がより大きな問題であった。1925年11月から12月、奉天軍の郭松齡（1883-1925）が東北国民軍を組織し、日本軍の援助を受けていた同じ奉天派の張作霖の打倒を図ったが、張の反撃を受け敗北。張作霖は直隸派の呉佩孚（1874-1939）、奉天派の張宗昌（1881-1932）、山西軍閥の閻錫山（1883-1960）と手を組み、国民軍を結成していた馮玉祥（1882-1948）への対立姿勢を強めていた。1926年3月、張作霖・呉佩孚の奉直連合軍が馮率いる国民軍を攻撃。その戦闘中の3月12日、国民軍は奉直軍の進攻に備えて封鎖していた天津大沽港で、日本の駆逐艦「藤」と「薄」の2隻を奉天軍のものと誤認、射撃して日本側に負傷者3名を出した。日本軍はこれに反撃し、国民軍は死傷者十数人を出す結果となった。これは「大沽事件」と呼ばれている。3月16日、日本・アメリカ・イギリス・フランス・ロシア・ドイツ・イタリア・オーストリアの八か国は、この大沽事件を「辛丑条約」〔1901年に締結した義和団事件最終議定書：杉村注〕違反として封鎖の解除等5つの条件を中国政府に提出、期限付きの最後通牒とした。これに対し、執政していた段祺瑞は期限の3月18日には最後通牒を全面受諾、民衆の怒りを買った。3月18日、北京の天安門前に3万人の群衆が集結し、中国共産党北方区書記であった李大釗（1889-1927）らが全国一致で八か国の最後通牒に対抗すべきであると訴え、反帝国主義の抗議集会を行なった。集会終了後、2千名超の群衆が執政府に請願に向かったが、國務院前で軍警が隊伍に発砲、その場で学生を含む47人が死亡し、200人余りが負傷した。隊伍を指揮していた李大釗も傷を負った。以上が三一八事件のあらましである。¹⁰

当時北京におり、自らの教え子 2 名を三一八事件で喪った魯迅は、幾つもの文章を発表し¹¹、沈痛な憤りを籠めて「これは一つの事件の結末ではない、一つの事件の発端だ」と述べ、3月18日を「民国以来、最も暗黒の日」¹²と記した。実際、周作人（1885-1967）、朱自清（1898-1948）、林語堂（1895-1976）、梁啓超（1873-1929）、聞一多（1899-1946）など、多くの作家・文人が三一八事件に衝撃を受け、段祺瑞政府を譴責する文章を発表している。楊振声の「阿蘭的母親」もその一環としてとらえられるだろう。これまでのところ、「阿蘭的母親」に関する専論はない。

2. 3. 「済南城上」——ある兄弟と済南事件

一方の「済南城上」は、済南に住む大学生の兄弟の物語である。アパートに戻って来た兄皖生が「日本の奴らがこの町を占拠しようとしてるぞ！」と弟湘生に告げる。「抵抗しない訳にはいかない」と決意を述べる皖生。外からは砲声が聞えてくる。湘生は突然、「兄さん、絡絲ルオスーのことが好きだろ？」と尋ねる。皖生は「好きだよ、妹シアンションみたいにね」と冗談めかして答え、弟が絡絲ルオスーを好きなことを知り、「彼女の所へ行ってやれよ」という。頷いて外出しようとする湘生の手を取ると、皖生は「さようなら」と別れを告げた。夜、皖生は戦闘が行われている済南の町へと出て行く。砲声、壁や家屋が崩れる音、泣き声。皖生は無惨な死体も多く目にした。皖生は兵士の遺体から銃と弾を取り上げると装填し、十数人の中国兵に混じって戦闘に加わった。城壁の上から敵を撃つ。東の空が白み始めた頃、城壁上には皖生と一人の兵士の二人だけとなった。戦闘が小休止状態となり、二人は胸墻にもたれながら親しげに話を交わす。兵士は「君の援護は本当に助けになったよ。昨日の午後も、南城の方である学生が助けてくれたんだけど、その彼は負傷しちゃってね」と言う。「昨日の午後？」「そう。そう言えば、君にちょっと似てる」。皖生は兵士の説明する姿形から、その負傷者が弟湘生だと知り、急いで南城へ向かおうとする。その時、北東で砲火が激しくなっている様子が伝わって来た。皖生は銃を担いで北東の方へ歩き出す兵士に「僕も君と一緒に行く」と言う。「弟を助けに行くんじゃないのか？」皖生は首を振り、服の袖で涙を拭くと、砲火の激しくなっていく方へ走って行った。

作品の背景となったのは、1928年5月3日、済南において日本軍と中国軍が交戦した済南事件である。経緯を振り返っておこう。1926年の三一八事件の後、段祺瑞は足場を失い下野するのであるが、同年7月、国民党の蒋介石が国民革命軍総司令として北方の軍閥打倒を掲げた北伐を断行する。北伐軍は二ヶ月も経たないうちに漢陽・漢口・武昌を落とし、揚子江中流一帯を支配下に収めた。更に快進撃は続き、九江・南昌・杭州・上海を落として、1927年3月24日には南京に入城する。しかし、国民党と共産党の関係は悪化の一途を辿っていた。第一次国共合作（1924）は、反帝国主義のスローガンを掲げ、国民革命の達成を目的としていたのであるが、両陣営における合作に反対する声は、そもそも小さくはなかったのである。国共合作の中心的存在であった孫文（1866-1925）の死後、蒋介石が軍政両面の実権を握り、国共の分裂は決定的となる。北伐軍の南京入城の日起きた南京事件〔中国人兵士による外国人宣教師殺害事件。事件後、英米両軍は居留民保護の目的で、南京場内を砲撃。2千人以上の死傷者が出た。：杉村注〕について、イギリス・アメリカ・フランス・日本・イタリアから責任を問われた蒋介石は、列国からの政権承認のために共産党との分裂を選ぶ。その結果、4月12日には上海でクーデターを起こし、共産党への武力弾圧を開始する。4月15日、蔣は国民党左派の汪精衛（1883-1944）が中心となっていた武漢政府に反旗を翻し、南京に国民政府を樹立。武漢政府は蔣の党籍を剥奪し、対立姿勢を強めるが、汪も共産党と袂を分かつことを決意。7月15日に共産主義者の除名が決議され、8月5日には共産党取締令、8日には共産党幹部の逮捕令が発令され、国共合作は完全に破綻した。国民党の武漢政府と南京政府は北伐を至上命題として手を組み、両政府は南京に合体、蒋介石は身を退いて日本に渡った。しかし、蔣のいない革命軍は統率が取れず、1928年1月、蒋介石は復職して革命軍総司令となって北伐を再開。この第二次北伐は山西の閻錫山、河南・陝西の馮玉祥の協力があり速やかに進んだ。北伐軍が済南に入った5月に起きたのが済南事件である。北伐軍の進撃に対して、日本の田中義一（1864-1929）内閣は4月19日、日本人居留民保護を目的として第二次山東出兵を閣議決定していた。5月2日、日本の陸軍部隊が済南に到着。この時、日本が済南に目を着けていたのは、済南が交通の中心であったからである。済

南を占領し、青島・済南間の鉄道である膠済鉄道を押さえることができれば、確実に北伐軍の前進を妨害できるのであった。5月3日の事件発生の原因については、日中双方の資料・見解が完全に異なり、現時点では事実関係は明らかになっていない。しかし、日中衝突の発端は国民革命軍が貼ろうとした政治宣伝用のポスターに起因し、どちらが先に発砲したかは保留するにしても、結果的に戦闘は拡大、4日にも散発的な衝突が続いた。5日までに日本人居留民13名の死亡が確認され、事件後、中国側が発表した軍民の犠牲者は3600名余りに上る。この事件が、日中衝突の起点となり、中国国民の反日感情の高まりと蒋介石政権の対日政策の硬化を招き、抗日の気運は中国全土へ拡大、日中全面衝突へとつながっていくのである。¹³

楊振声は当時広州にいたため、自身は済南における様子を実際には目にしておらず、また「済南城上」の執筆動機などについても回想していないが、楊と親しかった作家沈從文（1902-1988）に以下のような回想がある。

北伐軍が済南に到着すると、日本軍が出兵して膠済鉄道を占拠し、済南を包囲した。我が国の外交特派員の蔡公時が殉職し、楊は一文を著し、人民が虐殺される惨状を描き、後にその作品は全国の中学の教科書に収録された。¹⁴

「全国の中学の教科書」とは『初中新国語』第二巻を指しており、「人民が虐殺される惨状を描き」という一文には、済南事件に対する一般的中国人の認識が示されているだろう。これまでのところ、「済南城上」に関する専論はないが、作品自体は「“五三”事件を反映した作品の中で最も重要な一作」¹⁵と見なされている。

3. 悲劇的運命に課せられたもの——初期作品からの作風の変容

上述のように、「阿蘭の母親」と「済南城上」はともに実際に起きた事件を下敷きにしている。しかも掲載誌である『現代評論』の刊行日からは、事件後、時間をおかずに執筆に取りかかったことがわかる。三一八事件と済南事件が楊

振声に強い影響を与え、彼をして執筆に向かわしめたのであろう。また、明示せずに悲しい結末を予想させるラストという点で、二作は共通している。

そもそも、楊振声の小説創作は第一作の「漁家」(1919)では極貧の漁師一家の救いようのない運命を、続く「一個兵的家(一人の家)」(1919)では兵士であった父の死後、物乞いをして生きていかざるを得ない老人と孫の姿を、「貞女」(1920)では既に亡くなっている男性に嫁がねばならない少女の理不尽な婚姻形態を描くなど、ほとんどが社会的弱者の重苦しい境遇を描いたものである。『現代評論』派とは対立していた魯迅が「楊振声は極力人民の間の苦しみを描写しようと努めた」¹⁶と評したように、楊の創作動機の根底には貧しい人々への同情と儒教的道徳に縛られた旧社会への憎悪があったと言えるだろう。しかしながら、これらの作品はもう一方で、悲惨な運命に抗うことのできない「人民の間の苦しみを描写しようと努めた」に過ぎないとも言える。それは、人並みの生活に憧れつつも餓死する男を描いた「磨面的老王(粉ひきのラオワン)」(1921)、兄の死後、嫂とその子供達を養うために自身の飢えに堪えつつ奔走し、結果投獄される青年の「李松の罪(李松の罪)」(1925)も同様である。楊の筆の下、作品の登場人物達は辛い状況から脱け出せないどころか、最後には却ってより悪い方向へと身を落とすのである。これは虚構とは言え、当時の社会の最底辺で暮らす人々の過酷な現実を反映していた。「阿蘭的母亲」は確実にこの流れにあると言える。

その社会的弱者の悲惨な運命を描くことから一步踏み出し、作風上、ある変化を見せているのが「濟南城上」である。楊の眼差しの変容を見ていこう。

3. 1. 娘への愛に生きて——阿蘭の母親

まず「阿蘭的母亲」において、父親の死後、母親と娘が支え合って生きているさまは次のように描写されている。

阿蘭は母親から離れられず、母親も阿蘭から離れられなかった。母親が針仕事をしていると、阿蘭はその傍らで糸の整理をした。母親が洗濯物をたたく時には、阿蘭は傍らで洗濯物を畳んだ。夜、母親が阿蘭に勉強を教えると、冬ではあったが、夜

が長いとはあまり思わずに済んだ。

阿蘭が学校へ上がって勉強するようになると、母親は最初の数日、心配のあまり、まるで何年も別れているかのようなようだった。阿蘭が家を出ると、家の中はあまりに広々と感じられてしまう。全ての家具は静か過ぎるように見える。(中略) 阿蘭が戻って来た時には、母親はまるでなくした宝物が見付かったかのように、飛んで行って抱きしめると、やたらと「瘦せちゃったわね」と言った。¹⁷

この宝物同然の娘が14歳の年に病気になった際は、母親は寝ずの番で必死の看病をする。

阿蘭の熱は、母親の心をまるで焼くかのように痛めた。母親はまるまる三日三晩寝ずに、目に涙を溜め、一つきりの灯りの下、阿蘭を見つめてぼんやりとしていた。阿蘭の父親が生きていた日々を思い出し、その父親の死に際を思い出し、もし阿蘭に万一のことがあったら...と考え、そんなことは考えまいとするのだった。

しかし、回復後、阿蘭はデモに参加し殺される。阿蘭の死を知らせるために駆け付けた馬先生の目に入ったのは、娘のことばかり口にする母親の姿だった。「だんだん暖かくなってきましたよね。私、ここで娘のために裕を作ってやっただんですよ。これ、私の昔の服をもとにしたんです。この色、阿蘭が着たらきっと綺麗だわ」、「あ、もうすぐ阿蘭が帰って来ますよね。薬を煎じてやらなくちゃ。阿蘭が帰って来たら飲ませないと」、「ご存知でしょうけど、あの子の父親が死んでから、私には本当にあの子だけなんです。夫が亡くなった時、もしあの子がいなかったら、私、今まで生きられてなかったと思います！」母親の娘への溢れる愛は、馬先生に真実を語る隙を与えない。

馬先生の唇は何度か開きかけ、その都度震えて閉じた。突然、馬先生の目に涙が溢れた。彼女は慌てて向きを変えると、口の中で「それじゃ」と言って、外へ飛び出して行った。

夫を喪った若い母親が、ひたすら娘だけを心の拠り所にして生きている様は、彼女が阿蘭の死を知ったら、恐らく精神の均衡を失うか、或いは彼女のその後の生が長くはないであろうことを読者に予見させる。生活面での困窮、寡婦への蔑視など、旧来の儒教道徳が色濃く残る村社会で寡婦が生きていくことの辛酸と困難は、魯迅が『祝福』（1924）で描いた通りであり、阿蘭の母親の不幸は娘を喪うことだけに留まらない。「阿蘭的母親」のラストは、彼女がこの先生きるべき道を失ったことを暗示しているのである。

ここで阿蘭が死んだ三一八事件の作品中の意味を確認しておこう。「その日が来た。つまり中国が共和制になってから十五年目の三月十八日のその日」とある。当時の読者はすぐに何を指しているか了解するであろう。「折も折、その日各界は八か国の大沽事件への最後通牒に反対するために、隊伍を成して執政府へ請願に行った。阿蘭も学校の隊伍について行った。執政府の衛兵隊が民衆を殺戮した時、阿蘭はか弱い仔羊のように殺された」。作品中、14歳の阿蘭については政治的姿勢が示されていない。彼女については人物造型すら明確には示されず、「阿蘭の母親」の娘でしかない。そして、阿蘭にとっては3月18日も、単に病気の回復後の初登校日に過ぎなかったのである。デモへの参加も、学校の組織した隊列に加わっただけであった。即ち阿蘭の死は不運の積み重ねであり、その意味では「阿蘭的母親」において、三一八事件は母娘の不幸の原因ではあっても遠景に過ぎないのである。本作品における楊振声の狙いは、気の毒な母と娘を描くことで、段祺瑞政府が民衆に発砲したという「民国以来、最も暗黒」たる三一八事件への憤りを示すことにあっただけと思われる。しかし本作においては、阿蘭の死が三一八事件によるものであろうと、例えば他の偶発的な事件によるものであろうと、母親が受けるであろう衝撃の大きさには全く関係がなく、分離不安のように娘を案じる母親の姿は、寧ろそれまでの楊の小説における社会の底辺で喘ぐ人々の姿と重なり、楊自身の本来の創作意図よりも悲痛な余韻を残す。列強八か国の中国に対する横暴や列強に対する段祺瑞政府の弱腰姿勢への楊の憤りは、五四運動の際の民族主義的愛国心につながるものではあろうが、「阿蘭的母親」においては、初期作品同様、「社会的弱者の重苦しい境遇」への同情という形で表れたのであった。

3. 2. 愛も情も乗り越える——皖生

では、同じように実際に起きた事件を背景としている「済南城上」はどうか。作品冒頭、皖生は日本軍による済南の占領を弟湘生に告げ、「遅かれ早かれ日本の奴らの手に落ちることになるだろうな！けど、僕達は抵抗しない訳にはいかない。たとえ僕達の力が奴らに屈したとしても、精神は屈してはいけないんだ」¹⁸と決然とした姿勢を示す。一方、湘生は女友達のことが気懸りな様子である。抽斗の中から女友達の写真を取り出して、兄に話しかける。

「兄さん」

「うん？」

「絡絲のことが好きだろ？」目は兄を見ようとはせず、ただ写真を見詰めている。

「気立ての良い子だよな」兄は弟が写真を見詰めているのを見た。

「彼女のこと、愛してる？」弟は兄を見た。

「妹みたいに愛してるさ」兄は冗談を言った。

弟の顔が紅くなり、しばらく沈黙した。

「どうした！」兄は弟が気の毒になった。

「絡絲は、兄さんのことが大好きだって言ってた」弟は難しい局面をどうにか越えた。

「たくさん女の子が僕のことを好きだよ——兄貴としてね」兄は笑いながら言った。

(中略)「お前、絡絲に会いに行行ってやれよ」。兄は弟に向かって穏やかに言った。

(中略)「行けよ？彼女、お前を待ってるぞ！」兄は少し説得するように言った。

このやりとりからは、湘生は絡絲が好きで、絡絲は皖生が好きであるらしいことがわかる。肝腎の皖生の気持ちは明確には示されていないが、湘生から「(絡絲のことが)好き？」ではなく、「好きだろ？」と尋ねられていることから、これまでの関係性においては皖生も彼女に好意を持っていたらしいことが示唆される。しかし、皖生は湘生に「彼女に会いに行行ってやれ」と言う。

五分後、砲声が少し弱まったのが伝わって来た。弟は外出しようとした。兄は彼の手を取り言った。「弟よ！」それは普段は使わない呼び名だった。弟の目が兄に向け

られた。「さようなら」兄はしばらくして、それだけ言った。

その後、皖生が弟を女友達に会いに行かせ、更に改まって弟に別れを告げたのは、日本軍との戦闘に加わるためであったことが示される。町に出た皖生の目に映るのは、日本軍に殺されたらしい民衆の最後の呻きと死体だった。

突然何かにつまずき、倒れそうになった。皖生が足元を見ると、月の光が一人の女の死体を照らしていた。血だるまになり、片方の足は爆破によって失われていた。まだ一歳にも満たない子供が女の胸元で乳を吸っていた。

皖生が城壁近くまで行く頃には、月はもう完全に黒雲から姿を現しており、城壁の内側の斜面に既に多くの兵士の死体が積み重なっているのが目に入った。死体の山からはまだ呻き声が上がっていた。

沈従文が「人民が虐殺される惨状」と評した件^{くだり}である。前述の通り、中国の民衆の反日感情を一気に高めることになった済南事件については、1928年当時、各新聞社がこぞって報道していた。¹⁹ 楊はそれを基にしたに違いない。

死体を目にした皖生の感慨は全く語られない。彼はただ兵士の死体から銃と弾を取ると、戦闘に加わるのである。東の空が白み始める頃までには、自身も左腕に傷を負いつつも日本兵を何人か撃ち殺す。そして一人の兵士と二人きりになり、言葉を交わす。

「なあ、今回、君には随分助かったよ。昨日の午後、僕らが城南にいた時も、学生が助けてくれたんだ。良いヤツでさ、凄く大胆に戦ってくれた。ただ、隠れるってことを知らないみたいで、結局負傷しちゃったんだけどね」

「昨日の午後って言ったかい？」皖生は尋ねた。

「そうだよ」

「どんな様子だった？」

「身長は君とどっこいかな。でも本当にちょっと君に似てるなあ」兵士は皖生の目をじろじろ眺めて言った。

皖生の手から煙草が落ちた。

「青い学生服を着てた？」彼は慌てて尋ねた。

「そうだ」

皖生はその学生が湘生だと知る。そして、傷は重かったのかと尋ね、「左肩をやられた。救助されてたから、死ぬことはないんじゃないかな」との答えを得、弟を助けにしようとする。しかし北東の方で戦闘が激化している気配を感じると、戦いに向かおうとする兵士に声をかける。

「待て！」皖生は叫んだ。

兵士は振り返り、皖生が城南へ行こうとせずに、突っ立ってただ北東の方を眺めているのを目にした。

「どうした？」兵士は尋ねた。

皖生は何も言わずに、やはりぼんやりと立ちつくしていた。

「僕は行くぞ」兵士は言った。

「僕も君と一緒に行くよ」

「君の弟のことは？助けに行かないのか？」

皖生は首を振り、袖で涙を拭うと、その兵士と一緒に北東の砲火が激しくなっている方へ駆けて行った。

前述のように、主要登場人物がある方向へ向かって走って行き、姿を消し、それが悲しい結末を予想させるという点で、「阿蘭的母親」と「済南城上」は全く共通している。しかし「阿蘭的母親」において、阿蘭の死を告げるという、馬先生に課せられ果たせなかった使命が、三一八事件が照らし出した当時の中国の国際的立場の低さと中国民衆の弱小さに直結している。一方、「済南城上」においては、皖生が女性への愛情を断ち切って闘いに参加し、最後には弟への情すらも振り切って砲火を目指していることで、悲しい結末を予感させつつも悲壮とも呼べる勇敢な姿を浮かび上げているのである。

ともに家族との別れを描いた作品であるが、「阿蘭的母親」での母娘の別れは

悲痛で傷ましいばかりであり、国や民族への思いなどについては言及されないのに対し、「済南城上」での兄弟の別れは個人的な愛と情を大切にしながらも、民族や国をより重要なものとしてとらえていることが明確に示されている。作品前半の、皖生が女性への愛情や弟湘生への肉親としての情を大切にしている描写は、後半部において皖生が涙を拭って砲火を目指して走っていく最後の一行を強く印象付けることになる。

一見同じようなラストシーンを描きつつ、意味付けが全く異なるという例は、楊振声の「貞女」にも見られるが²⁰、楊の 1926 年の「阿蘭の母親」から 1928 年の「済南城上」への作風の変容は、社会の底辺に生きる貧しくか弱い人々ではなく、泣きながらも立ち上がり、困難へと立ち向かう人々を焦点化し、主人公とする過程であったと言えよう。五四運動と同様に、楊にとっては出身地山東の省都たる済南で起きた事件は、自らの帰属意識に強く訴えかけるものであり、遠く離れた広州にいなながらも筆を執って抗日の色彩を帯びた作品を書かざるを得ないほどであったのだ。愛国心に基づいた英雄的行為を讃える姿勢は、五四運動の旗手であった楊ならではの言えるだろう。

4. 結——「愛国小英雄」を描く

2. 3. で述べたように、「済南城上」は教科書『初中新国語』に収録された。済南事件に材を取った作品は、例えば『現代評論』では、楊より早く第 3 巻第 179 期（1928 年 5 月 12 日）に袁昌英（1894-1973）が一幕劇の戯曲「前方戦士（前線の戦士）」を掲載していたし、詩歌を含めれば一定数に上る。²¹ そうした作品群の中から、楊の「済南城上」が選定された経緯や『初中新国語』の編纂者などについては不明だが、1940 年、「済南城上」は教科書の収録から外されることになった。

1940 年 3 月 30 日、汪精衛政権が成立。「国民政府政綱」が發布され、「反共産主義と平和的建国を教育方針とし、並びに科学教育を提唱し、大袈裟で無内容な学風を取り除く」ことを掲げた。

この新しい教育方針を貫徹するために、汪精衛傀儡政権当局はまず教科書の改編を行い、「中日の国交を妨害する」内容を一切削除した。例えば『高小国文読本』第一巻の「国の敵に復讐する」の字句、『初中新国語』第二巻の『王冕の少年時代（王冕の少年時代）』、『戦地一日（戦地の一日）』、『抗戦受傷的追憶（抗日戦争で負傷した思い出）』、『済南城上』、第五巻の『川原中尉戦斃記（川原中尉戦死記）』、第六巻の『戚継光伝』、『南口喋血記（南口の血の海の記録）』等の文章が全て削除の憂き目に遭ったのである。²²

また、中国の愛国主義教育の文脈では次のような記述もある。楊振声とは直接には関係ないと思われるが、上海などで幾つもの中学・高校の校長を務めた呉瑞年（1900-1985）についての紹介記事である。

彼は中華民族としての気骨を堅持しており、日本の傀儡政権には一向に妥協しなかった。当時、日本の傀儡政権は学校における奴隷化教育の推進を強制しており（中略）、ある一人の国語教師が『済南城上』を扱って授業をし、学生に対して愛国主義教育を行なったところ、見付かってしまい、政府は校長に当該教師を誅にするよう脅しをかけた。しかし、呉瑞年は教科書に書いてある通りに授業を行うことに間違いはないとし、当該教師を守った。²³

日本の傀儡政府であった汪精衛政権下、実際に愛国主義的授業への妨害があったことを示すエピソードである。

こうした引用から見て取れるのは、「済南城上」が選定され、そして収録から外された背景には、選定した側にも削除した側にも、皖生の行為が民族主義的愛国心に基づくものであり、「済南城上」が読み手である中学生に自らの愛国心を意識させる作品であるという共通認識があったということである。

西成彦は「戦場に不在であったものによる戦場再現」について、「戦争の悲惨とはあちら側（＝戦場）にだけ生起する選ばれた悲惨なのではない。こちら側（＝非戦場）の悲惨とあちら側のそれとが一線をまたいで隣接しあい、あちら側の残酷さを空虚な形でしか再現しえないこちら側の悲惨の方がややもすればあ

ちら側の悲惨を凌駕してしまうかもしれないという逆説」²⁴と述べる。楊振声は戦地に立ったことはなく、従って「済南城上」は虚構であり、「済南城上」を読む中学生も無論、戦場を知らない。また、皖生は正規の戦闘訓練を受けた兵士、即ち戦争のプロフェッショナルではなく、一介の大学生に過ぎない。しかし、それゆえ却ってごく普通の民衆の熱い愛国心を表しており、皖生が愛も情も振り切って砲火へ向かっていく姿は、まさに「こちら側（＝非戦場）の悲惨」として読み手に理解しやすく、共感を呼び、普遍性を得る。そして、皖生は虚構中の架空の人物ではあるが、「済南城上」が中学校の国語の教科書に収録されたことで、結果として「愛国小英雄」になったのだと言えよう。

中国において「英雄」とは、基本的に国に命を捧げた烈士を指し、英雄（烈士）かそうでないかは現在、国の決定による。²⁵そして正史とされる「大文字」の歴史の中で、国家的英雄は大々的に顕彰されてきた。その顕彰については、例えば国民党の陸軍上将であり、宜昌作戦において戦死した張自忠（1891-1940）への顕彰の過程を分析したアーサー・ウォルドロンの研究に詳しい。ウォルドロンによれば、中国においては張の戦死の地や墓地だけでなく、出生地も聖地となって記念碑が創建され、北京・上海・天津・武漢等の大都市に彼の名を冠した通りが出来るなど、張の死は文化資源になっていき、壮烈な英雄の物語が創出されていった。²⁶それは乱暴な括りの誇りを恐れずに言えば、中国において英雄の殉難は高い評価を与えられるべき死であり、その点はまさに司馬遷（前145頃-前86頃）が述べた通り、「死は或は泰山より重く或は鴻毛より軽し」（「報任少卿書」）の伝統なのかもしれない。吉澤誠一郎は「死の意味は、生き残った他者が創出するものである。その創出が恣意的であって、時に政治的に利用されることがあるのは不可避であろう」²⁷と述べるが、英雄顕彰とは国家の存在価値とも相俟って、まさに政治によって規定されるものなのである。こうした物語化や政治化に鑑みれば、「済南城上」が中学の教科書に収録され（た上に削除され）たということは、皖生の「愛国小英雄」化が行われ、「済南城上」が「抗日作品」であると国家的に公式認定されたということでもある。

楊振声は1943年には「荒島上の故事（無人島の物語）」を執筆し、日本兵に毅然とした態度で対応し、その結果殺されてしまった少女と、その一部始終を

目撃し、少女の復讐のために自らの命を投げ出して日本軍の兵士を死に追いやる青年を描いた。楊の作品における抗日色が一層強まっているのを見て取れる。1920年代後半から30年代にかけて、中国が列強への抵抗、特に日本に対する強い徹底抗戦の姿勢を打ち出していく中で、中国の民衆の民族主義的な愛国心も日増しに高まっていく。楊振声が社会的弱者への同情的な眼差しから、大きく作風を変えていったのも、そうした中国の民衆全体の愛国心の昂揚という文脈中に置いて考えられるだろう。日本の山東支配への抵抗から始まった楊の政治活動・文学活動は、自身が山東籍であるという個人的な問題から、「生命をも国家のために投げ出させるように誘惑する言説・儀礼」²⁸の大きな流れに加わることで、「愛国小英雄」を誕生させた。楊の個人的言説（＝“小我”）は政治的文脈（＝“大我”）へと姿を変えていったのである。

（金沢大学国際基幹教育院外国語教育系）

1 愛国主義、民族主義については、吉澤誠一郎著『愛国主義の創成——ナショナリズムから近代中国を見る』（岩波書店、2003年）に「ナショナリズムの主張とは、そもそもが、それほど論理的な説得力をもつというよりも、情念に訴えかけようとする性格のもの」とあり、「厳密な定義を与えて立論しようとする試み」は困難とする。本稿では、吉澤が示した「中国」という国（または、それに相当するもの）に強い帰属意識を感じ、その将来を憂え、危機にどう対処するかという議論・運動に注目し、これを、ひとまず史料中の語のひとつを借りて「愛国主義」と称する」に沿い、「愛国主義」の語を用いるものとする。

2 五四運動及びそれまでの経緯については、斎藤道彦著『五四運動の虚像と実像』（中央大学出版部、1992年）、市子宙三著『世界の歴史 20 中国の近代』（河出書房新社、1990年）、郭卿友主編『中国現代史』（中央民族大学出版社、1997年）を参照した。

3 楊振声（1890-1956）、山東省蓬萊出身。楊自身の経歴及び彼の創作については、拙稿「楊振声「抛錨」・石華父『海葬』・柯靈『海誓』をめぐって——恋愛と復讐の変奏」（『お茶の水女子大学中国文学会報』第32号、2013年、pp.17-33）、「楊振声「搶親」・「報復」と民国期中国の強奪婚——少女は語らない」（『言語文化論叢』（金沢大学外国語教育研究センター紀要）第18号、2014年3月、pp.83-105）、「ロミオはジュリエット——楊振声「彼女はなぜ突然気が触れたか」と凌叔華「こんなこともある」」（『言語文化論叢』（金沢大学外国語教育研究センター紀要）第19号、2015年3月、pp.119-141）などに詳しい。

- 4 傅斯年は山東聊城出身、歴史・言語学者、考古学者。5月4日のデモ行進を指揮した五四運動の学生リーダーの一人であったが、趙家楼焼き討ちの件での逮捕はされていない。
- 5 拙稿「楊振声と「五四」 楊振声の「五四」、『野草』（中国文芸研究会機関誌）第94号、2014年8月、pp.41-60。
- 6 楊振声の具体的な経歴については、季培剛著『楊振声年譜』上下、学苑出版社、2015年を参照した。
- 7 『現代評論』に関しては、陳荒煤主編『中国現代文学期刊目録匯編』（天津人民出版社、1988年）、丸山昇・伊藤虎丸・新村徹編『中国現代文学事典』（東京堂出版、昭和60年）、周葱秀・涂明著『中国近現代文化期刊史』（山西教育出版社、1999年）を参照した。
- 8 注7前掲『中国現代文学期刊目録匯編』に拠る。
- 9 「広州大火下の日記」の掲載された『現代評論』三周年記念増刊号の具体的な刊行日は不明。『現代評論』影印本、岳麓書社、1999年には「中華民國十七年六月初版」とあるのみ。李宗剛・謝慧聡輯校『楊振声文献史料匯編』（山東人民出版社、2016年）に「1928年1月1日」とあるのは誤り。
- 10 三一八事件及びそれまでの経緯については、注2郭卿友前掲書、魯迅「無花的薔薇之二（花なきバラの二）」（注11参照）の「三一八惨案」の注釈、藤井省三著『魯迅事典』三省堂、2002年等を参照した。
- 11 魯迅が三一八事件について発表した文章には、執筆順に以下のものがある。「無花的薔薇之二（花なきバラの二）」（『語絲』周刊第72期、1926年3月29日）、「死地」（死に場所）（『国民新報副刊』1926年3月30日）、「可惨与可笑（傷ましさと可笑しさ）」（『京報副刊』1926年3月28日）、「記念劉和珍君（劉和珍君を記念する）」（『語絲』周刊第74期、1926年4月12日）、「空談」（『国民新報副刊』1926年4月10日）。後に全て『華蓋集続編』上海北新書局、1928年10月に収録された。魯迅はこれらの中で、国民政府と軍閥と関係のある文人や学者を痛罵しており、とりわけ『現代評論』派の陳源・徐志摩を名指しで批判している。テキストは『魯迅全集』第3巻（人民文学出版社、1996年）に拠る。
- 12 注11前掲魯迅「無花的薔薇之二（花なきバラの二）」
- 13 済南事件およびそれまでの経緯については、注2前掲書『世界の歴史20 中国の近代』、ウィリアム・F・モートン「済南事変——一九二八—一九二九」（『国際政治』第15号、1961年）、服部龍二「済南事件の経緯と原因」（『軍事史学』第34巻第2号、1998年）、宮田昌明「再考・済南事件」（『軍事史学』第42巻第2号、2006年）を参照した。
- 14 沈從文のこの文章は未刊の手稿。季培剛著『楊振声年譜』上冊（学苑出版社、2015年）の引用に拠る。
- 15 冷川「済南“五三”惨案の文学表現及其意義」、『中国現代文学研究叢刊』2007年第3期、pp.222-234。
- 16 魯迅『『中国新文学大系』小説二集序』、『魯迅全集』第6巻、人民文学出版社、1996年。
- 17 楊振声「阿蘭の母親」、『楊振声選集』人民文学出版社、1987年。以後、「阿蘭の母親」の引用は本テキストにより、拙訳を付す。
- 18 楊振声「済南城上」、同前楊振声前掲書。以後、「済南城上」の引用は本テキストによ

り、拙訳を付す。

19 例えば『申報』は5月4日に「済南で中日が衝突・日本兵が我が国の軍を挑発・発砲後死傷者多数・六時以後ようやく終息」（『申報』中華民國17年5月4日第4版）の見出しで、かなり詳しく済南事件の状況を報道し、13日まで連日、関連記事を掲載した。

20 楊振声の「貞女」（1920）は、明清時代の史書に見られる、故人に嫁いで一生再嫁しなかったり、死んだ夫の後を追って自死した女性達を紹介する記述と類似した構造で書かれているが、史書がそうした女性達を称賛しているのに対し、「貞女」は批判的な視座で描かれている。注5拙論に詳しい。

21 注15前掲冷川論文に詳しい。

22 『鳳凰週刊』記者陳祥「汪偽時代的奴化教育」、初出は『鳳凰週刊』2016年第6期総第571期、鳳凰週刊網 <http://www.ifengweeklv.com/detil.php?id=2586>（2018年11月29日閲覧）。

23 「吳瑞年 南京当代人物專題」博雅人物網 <http://mren.bvtravel.cn/history/1/wuruinian.html>（2018年11月29日閲覧）。吳瑞年は楊も留学していた米国コロンビア大学で化学を専攻し、修士号を取得しているため、楊振声と面識があった可能性はある。

24 西成彦「戦場に不在であるものによる戦場再現」、『現代思想』23巻1号、1995年1月号。

25 「烈士」は中華人民共和国の國務院が「烈士褒揚条例」に基づき、「祖国の防衛と社会主義建設の過程で犠牲になった人」が選定される。2014年8月31日、第12回全国人民代表大会において、毎年9月30日を烈士記念日とすることが決定し、国家的に烈士を記念顕彰するイベントを行うことが規定された。毎年9月30日には、北京の天安門広場で中国共産党・国家指導者が英雄を顕彰し献花するイベントが行われ、国営テレビ CCTV で中継されている。

26 Waldron, Arthur, “China’s New Remembering of World War II: The Case of Zhang Zizhong”, *Modern Asian Studies*, Volume30, Issue4, October 1996, pp.945-978

27 注1前掲吉澤著書。

28 同前。

【附記】本稿は学術研究助成基金助成金の交付を受けた基盤研究（C）「中華民国期における高等教育と中国知識人の文化活動——青島、済南、周辺都市を中心に」（課題番号：18K00358、研究代表者：早稲田大学・中村みどり）による研究成果の一部である。